

ラストアレスターヒストリー

1986年当時 BARDAHL ルシアトル本社の常務であり、且つ環太平洋のバーダール販売総責任者、河村雅夫はアメリカ滞在時バイヤーよりラストアレスターを開発製造しているCLI社を紹介されました。

当時、本〇技研の常務と親交が有り、将来は電気自動車になって行く事、駆動部分は日〇とか、〇芝が担当し、本〇自体は車体作りのメーカーになってしまう。

だからロケット(ジェット機かも)とかロボットを開発しているとの事を聞かされており、何か新しい商材を探求していた最中でした。

河村は海軍出身で船底に付いている鉛板の意味が分かっており、これとほぼ同じ原理によるラストアレスターは商品になると直感し、我々代理店協力の基、ラストアレスターにおける全権利を買い取りました。

ラストアレスターの誕生

アメリカのコンピューター機器メーカーCLI社(フロリダ・ドナルド・ルイス社長)はドナルド・ケイシー博士(ニクソン政権当時のペンタゴン、特にベトナム戦争時のコンピューターの指揮官、NASAの顧問としてこの分野では高名)の監修のもとに電子工学を応用し錆を物理的に抑える『ラストアレスター』を開発しました。

本体に内蔵されているコンピューターチップ CMOS (Computerized Memorize Organizational System) 採用による低電流は他のコンピューターを侵すことなく安全で高い効果を引き出します。



開発者 ドナルド・ケーシー博士

1989年3月にはNASAのスペースシャトル発射台の防錆機器としても採用されており、1993年オーストラリアの防錆協会からも大気中におけるカソード防錆として評価され、防錆の新しい文化として認められました。

東南アジア諸国においては当該諸国の大手企業が販売権を獲得し爆発的な売れ行きを示していました。

しかし本体から出力される12ボルト 0~300 ミリアンペアの電流でも回路で変換

された特殊な電流であることが理解されず、ただ電流を出力するまがい物が格安で市場に出回り、不評の為数年後には撤退する状況になりました。

日本国内においては 1987 年 2 月から発売し今日にいたっておりますが、『**大気の湿度を電解質と考え電気を流す**』と言う理論は日本の防錆学を研究した学者には到底理解できず、その方々を説得するのに大変手間が掛かりました。

しかし原理は兎も角、本当に錆で困っている方々が実機で効果を感じ、いすゞ自動車様を筆頭にカーメーカー 6 社から純正指定を頂きました。

電力会社・道路公団・NTT 重機メーカー、施設等からも支持を得ておりましたが、装着先の人事異動等の環境変化が有り、ご担当者にその都度初歩から理解して頂かなければならず、最終的に双方が疲労し代理店が淘汰されてしまいました。

それでも厳しい環境下で使用される車、施設等の防錆には『ラストアレスター』と絶大なる評価を頂く程になりました。

ラストアレスターは錆の進行を遅らせるだけでなく、塗装の艶を保ち色飛びを防ぐ効果も認められています。

最近では原材料の調達から製造まですべて日本で行われており、故障もほぼ皆無で安定した製品になりました。

令和 2 年 2 月

文責 バーダールプランニング株式会社

山口 正之